

今回は「盆踊り漫遊」をお休みして以下のテーマについて語りたい。

死について

竹中尚文

1. お葬式

テレビで「ちいさなお葬式」のコマーシャルを見て、気分が悪くなった。今回は、「死」について感じることや思いを述べることにした。

お葬式が大きかろうが小さかろうがどうでもいいことだ。「ちいさなお葬式」という言葉が踊るのは、お葬式がカネの話に終始するからだろう。お葬式の費用は、予想外の出費だったのかも知れない。ある葬儀屋さんは「最近、マスコミは葬儀屋が不当にもうけている、とばかりいつている」という。このアナウンス効果で、葬儀屋さんが不当な料金請求をしているイメージができてしまった。

私の感じるところではあるが、近年、葬儀屋さんが減った。葬儀会社ばかりになってきた。葬儀屋さんだった頃は、儲かるお葬式もあれば、儲からないお葬式があった。葬儀会社になって、儲からないお葬式をし

なくなった。経済的に苦しい家庭で人が亡くなっても、かつての葬儀屋さんはいなくなった。貧困家庭のお葬式を専門のようにする葬儀会社も現れた。「今回は赤字だなあ」といって、葬儀を引き受けてくれる業者はもういない。

この葬儀についての社会の変化は、どこかの業者によるものではない。我々の選択の結果なのである。そして、今、私たちの選択がこれからの社会を作るのである。

あるお婆さんが亡くなった時のことである。私は枕経に駆けつけた。集合住宅なので、近所の人たちが集まってくれた。その席で市の担当者の言葉が伝えられた。生活保護家庭なので、指定の業者が霊柩車で迎えに来るといふ。お婆さんの遺体を乗せて火葬場に行くが、近親者一人だけ立ち会えるという。

近所のおばちゃんが「私らはゴミ扱いや

なあ。カネのない私らは死んだら、市が回収にきて運んでいく」と泣いた。私は近所の人たちに、お葬式をしようと提案した。まず、一人千円か二千円の香典を頼んだ。私は知り合いの葬儀屋さんにお棺とドライアイスと霊柩車の手配を頼んだ。香典で、お棺とドライアイスはまかなえるかと計算した。霊柩車と火葬料は私が払うつもりでいた。香典は予想外に集まった。お婆さんの孫に、ホームセンターで寝間着浴衣を買ってきてもらった。家族で湯灌をして、納棺をした。集会場で葬儀をして、霊柩車が迎えにきた。自家用車のある者は、人々を乗せて霊柩車に従った。とっても心あたたまるお葬式だった。

先日の法事のことである。法要も終わって家族と雑談をしている時に、お婆さんが「私のお葬式は、この家で、仏壇の前でしてほしいのだけれど、できますか？」と尋ねた。私は「全く問題はありませんよ。ご存じのように3、40年前はそんなお葬式だったじゃないですか」と答えた。お婆さんは、家で家族に送ってほしいのだそうだ。付き合ってきた近所の人たちにも普段着でちょっと見送ってくれたら嬉しいという。私は、お婆さんの顔を見て微笑んで話

ができた。

この法事は、お婆さんのご主人の七回忌だった。亡くなって1、2年はお婆さんから笑顔が消えて、うつろな表情だった。少しずつ元気になってきて、自分のお葬式の話をしているときは生き生きした表情だった。お婆さんがまた生きることを始めたのだと思った。

2. いのち

私が枕経にお参りをしたとき、よく遺体や顔に触れる。そんな時、家族で「えっ!？」というような表情をする人がある。私が何か失礼なことをしたのかと思うのだが、違うようだ。故人の表情を変えようと試みて、家族の手を借りようとする微妙な空気になることがある。家族は死体を触りたくないことがあるようだ。

死がおとずれたのだから死体であるのだが、まだ暖かい。亡くなったとはいえ、親であったり祖父母であったりする。死によって、家族は死体に変化するのだろうか。

死を特別なことだと感じているのではなからうか？ 確かに家族の死は特別なことであるが、死は我々の身の回りにある。私も、あなたも必ず死ぬ。近年、我々は死を見ないようにして暮らすようになった。

見ないようにしているから、死を身近に感じない。

魚を食べるとき、トレイに乗った切り身を買ってきて、調理するのが通常になった。私が子どもの頃、魚は魚屋さんで買うものだった。魚屋さんは活きのいい魚をさばいて売ってくれることもあった。私は料理好きなので、活きた魚に包丁を入れることもあった。私が命を奪って、その魚を食べたのだ。

かつて、パキスタンで少年が目の前で鶏の首を切って、鶏肉を準備してくれた。同じ所で、やはり目の前で牛を殺して牛肉を提供してくれた。私は牛が絶命するのを見ていて、足が震える思いだった。私たちは日々の食事をするが、その先には必ず死がある。私たちは死に囲まれて生きている。

近年、日本の社会から生花店が激減しているのをご存じだろうか。人々が生花を買わなくなった。花を飾ると、美しいが必ずしおれる。花はその命を終えていく。私たちはそうした命にも触れなくなった。

私たちの生には死が伴われている。返上することもできない。いのちも与えられた

ものであるが、死も与えられたものである。死に向き合わないのは、生きることに向き合わないことではないか。

3. いのち終わるとき

私の好きな映画のひとつに、ジョン・トラボルタ主演の『フェノミナ』(1996年、アメリカ映画)がある。主人公は死を目前にして、愛する者、親しい者の心に残ることを望む。自分の死後、愛する者や親しい者が少しでも上手く生きていけるように行動する。死を迎えるまで生きるのである。生きることの延長に死がある。

現在、多くの人が終活の言葉のもとで、生きることを放棄するかのようになっている。お葬式の形はあとの人たちにまかせて、死を迎えるまでしっかりと生きてもらいたい。自分が開き直れなかった人生を送った腹いせかと思うようなことを言い残す人がいたりする。しっかりと生きることが大切である。その延長線上に死がある。そんな生き方をしたい。そんな死に方をしたいものだ。